

地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響

—地域からの恩恵と地域への愛着による媒介モデル—

尾関美喜¹⁾・吉澤寛之²⁾・中島誠³⁾・吉田琢哉⁴⁾・原田知佳⁵⁾・吉田俊和

問題と目的

近年、子どもの社会性の発達を育むうえで、地域行事等を通じた地域社会とのかかわりの重要性が指摘されている。その一環として、地域の伝統芸能や伝統工芸を体験的に学ぶ取り組みを通じて、子どもに地域社会とのつながりを意識させると同時に、地域に対する愛着を高めようという取り組みが国のレベルにおいても重視されている（文化庁政策課, 2002）。地域に対する愛着を高めることは、子どもの向社会的行動を促進することが実証的に示されていることから（尾関・朴・中島・吉澤・原田・吉田, 2008）、こうした活動を通じて子どもが地域社会やそこに居住する住民との交流機会を持つことは大きな意義があるといえよう。居住地域の社会環境もまた、子どもの健全な育成を目的とした政策の中では重視されている（生涯学習審議会, 1999）。こうした社会政策における注目の多さにもかかわらず、子どもの社会性や社会的行動に影響を及ぼす社会環境の側面を明らかにした実証研究は数少ないのが現状である。

集合的有能感と地域に対する愛着の関連

尾関ほか（2008）は、居住地域の環境要因の中でも、居住地域の集合的有能感（Sampson, 1989）が子どもの向社会的行動に及ぼす影響を検討した。集合的有能感とは、共通利益のために積極的に介入しようとする意思によって結びついた近隣住民の間の社会的な繋がりのことである（Sampson, 1989）。集合的有能感の高い地域では、住民相互の信頼関係に基づいたネットワークが形成され

ており、住民は地域に対する愛着を抱いており（Brown, Perkins, & Brown, 2004）、犯罪に対する許容度が低く（Browning, Feinberg, & Dietz, 2004）、犯罪の生起率も低い（Sampson, Raudenbush, & Earls, 1997）という特徴がある。

吉澤・吉田・原田・海上・朴・中島・尾関（2009）は、集合的有能感を、子どもの非行をはじめとした地域内の問題に住民が協力して対処する程度を示す非公式の社会的統制と、地域住民が相互に信頼し合い、連帯感を有している程度を表す社会的凝集・信頼の2側面からとらえている。集合的有能感は地域における子どもの逸脱行動との関連が近年検討されているものの（Odgers, Moffitt, Tach, Sampson, Taylor, Matthew, & Caspi, 2009）、向社会的行動との関連はほとんど検討されていない。しかし、子どもが周囲の他者の向社会的な振舞いを見て向社会的行動をとることの重要性を学ぶ（Staub, 2003）ことを考慮すれば、集合的有能感の高い地域で育った子どもは、地域の大人が相互に信頼し合い、助け合う様子を多く見ることから、向社会的行動の重要性を学習する可能性が高い。このことから、地域における集合的有能感は子どもの逸脱行動のみならず、向社会的行動にも影響を及ぼすと考えられる。

尾関ほか（2008）では、子どもが、居住地域の大人たちの連帯感の強さを表す社会的凝集・信頼を高く認知するほど、地域に対する愛着が高まり、向社会的行動をとりやすくなることが実証されている。しかし、この一連のプロセスにおいては、子ども自身と地域住民との相互作用との関連が考慮されておらず、集合的有能感に対する認知が地域に対する愛着を高める理由が不明確なままである。この点を踏まえ、まず本研究では、子どもの集合的有能感に対する認知が地域への愛着を高めるうえでの媒介要因として、地域からの恩恵に着目する。

人は集団に所属することで、様々な恩恵を受けることができるため、人は恩恵を求めて所属集団との心理的紐帯を構築すると考えられている（Haslam, Jetten, Postmes, & Haslam, 2008）。このことから、地域からの

- 1) 金沢大学大学教育開発・支援センター
- 2) 岐阜聖徳学園大学教育学部
- 3) 三重大学共通教育センター
- 4) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科（大学院研究生）
- 5) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）、日本学術振興会特別研究員

恩恵が得られると認知すれば、子どもは地域に対する愛着を高める可能性がある。地域社会の連帯意識の希薄化は居住地域における治安に対する不安を招く一因となっているが（平成19年度版国民生活白書）、もし大人が地域社会を安全で生活しやすい環境にするために協力している、つまり集合的有能感が高いと感じることができれば、子どもも居住地域では安全に社会生活を営めると感じることができるだろう。この安心感が子どもにとって地域から恩恵の一つとして認知され、地域に対する愛着を高める要因となりうるかもしれない。

さて、地域社会を生活しやすい環境にする活動には、青少年の非行を防ぐ活動や、健全な社会化を可能にする活動も含まれるだろう。これらの活動は、集合的有能感の高さと密接な関係があることが予測されるにもかかわらず、尾関ほか（2008）ではこうした具体的な大人の活動に関する指標が含まれていなかった。そこで本研究では、青少年の健全化に向けた取り組みを行う頻度についての大人による評定値をモデルの中に含め、これらの活動が子どもの集合的有能感の認知に及ぼす影響を検討する。そのうえで、大人による青少年の健全な社会化に向けた活動頻度が子どもの集合的有能感の認知を予測し、地域からの恩恵、地域に対する愛着を経て、向社会的行動に至る流れの存在について検討する。

地域住民との相互作用と地域に対する愛着

尾関ほか（2008）でも指摘されていることではあるが、地域住民との相互作用は地域に対する愛着を形成する重要な要因の一つであると考えられる。Mesch & Manor（1998）は、近隣住民との友好的な関わりが地域に対する愛着を促進すると指摘している。また、日本国内における大学生を対象とした研究でも、大学周辺の地域住民との付き合いや、周辺地域に居住する親しい人との付き合いが大学周辺地域への愛着の促進因であり、大学周辺

地域に対する愛着と当該地域におけるイベントへの参加には関連があることが示された（大山・添田・大野，2007）。以上の知見に基づけば、地域行事への参加を通じた地域住民との交流や、日常的な地域住民との相互作用もまた居住地域に対する愛着を高める要因の一つであり、向社会的行動につながると考えられる。地域住民との相互作用が子どもの行動や心理的側面に及ぼす影響を扱った心理学的研究は皆無ではあるが、本研究では成人を対象とした場合と同様に、地域住民との相互作用が地域に対する愛着を高めるかを探索的に検討する。

以上の議論をもとに、本研究ではFigure 1の仮説モデルを検討する。

方法

2009年2月に、A県内の公立中学校26校に通う1・2年生を対象に、質問紙調査を行った。この質問紙には本研究で用いた尺度以外にも複数の尺度が含まれていたが、ここでは本研究で用いた尺度に対する回答に不備のなかった3018名（男子1465名、女子1543名、不明10名）の回答を分析に用いた。

また、これらの中学校に勤務する教員に対しても、教師用の質問紙を配布した。回答の得られた545名（男性341名、女性202名、不明2名）の回答を分析に用いた。なお、教育歴は平均16.5年（ $SD=11.27$ ）、現在勤務している中学校での平均勤続年数は3.3年（ $SD=2.25$ ）であった。

教師用質問紙で用いられた項目

青少年の健全育成に向けた大人の取り組み 「生徒の保護者を含めた学校区の住民の方々のことについてお尋ねします。学校区に住む地域の人たちは、以下の行動（Table 1参照）を、どの程度行っていると思いますか。『まったくしない』から『非常によくする』までの中から、当てはまると思う数字一つに○をつけてください。

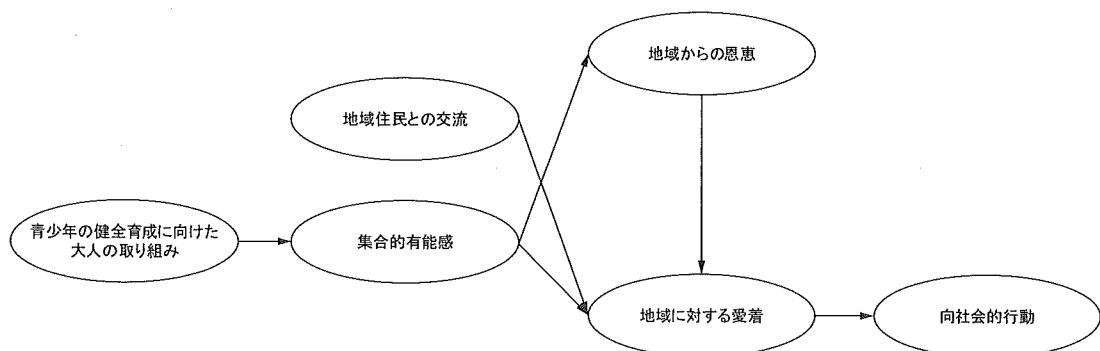


Figure 1 本研究で検討するモデル

なお、わからない場合は、『わからない (X)』に○をつけてください。』という指示のもと質問に回答した。なお、「1 全くしない」—「5 非常によくする」の5段階で評定した。

生徒用質問紙で用いられた項目

地域住民との私的交流 独自に作成した5項目（「近所に住んでいる大人と挨拶をしたり、話をしたりする」「近所の人に注意をされたり、しかられたりする」「近所の人にほめられる」「友達の家へ行ったとき、友達の親とも話をする」「近所の人たちと家族ぐるみの交流がある」）について、「あなたは普段、以下に書かれていることをどのくらい経験していますか。あてはまる数字一つに○をつけてください」という指示のもと、「1 まったく経験しない」—「5 非常によく経験する」の5段階で評定した。

地域住民との公的交流 独自に作成した、地域行事参加に関する11項目について、「あなたは今まで以下に書かれていることをどのくらい経験したことがありますか」という指示のもと、5段階で評定した。

地域住民との交流頻度 「あなたは、普段、地域の大人の（親や学校の先生は含まない）とどのくらい交流がありますか。あてはまるものに○をつけてください」という指示のもと、回答者は「1 ほぼ毎日」「2 週2, 3回」「3 週1回程度」「4 月に数回」「5 ほとんど交流がない」のいずれかあてはまるものに回答した。この尺度については、分析の際に逆転項目としての処理を行った。

集合的有能感 吉澤ほか（2009）を用いた。「非公式の社会的統制」を測定する6項目については、現在居住している地域について、「以下のような状況のとき、地域の大人たち（PTAや町内会の人など）は協力して対処したり、関わろうとしたりしていましたか（以下の状況を見過ごさずに、注意することなどを含む）。以下にあるそれぞれの項目について、4つの答えのうちあてはまる番号一つに○をつけてください（直接見ていなくてもだれかから聞いた話でもかまいません）」という指示のもと、「1 まったく協力していなかった」—「4 ひじょうに協力していた」の4段階で評定した。「社会的凝集・信頼」を測定する6項目については、「あなたが現在住んでいる地域の大人たちは、以下のようなことに対して、どのように考えていると思いますか。以下にあるそれぞれの項目について、4つの答えのうちあてはまる番号一つに○をつけてください」という指示のもと、「1 まったくそう思わない」—「4 ひじょうにそう思う」の4段階で評定した。

地域からの恩恵 「あなたは地域社会からどのくらい

恩恵や助け（地域に住む人から勉強や知識を教わる、整備された環境など、地域から何かをしてもらっているという感覚）を受けていると思いますか。あてはまるもの一つに○をつけてください」という指示のもと、回答者は「まったく受けていない」「あまり受けていない」「少しは受けている」「非常に受けている」のいずれかあてはまるものに回答した。入力及び分析に際しては、それぞれ順に1から4の点数を与えて順序尺度として扱った。

地域に対する愛着 尾関ほか（2008）で作成された項目の中から、因子負荷量の高い項目上位5項目を用いた（例「私はこの地域が好きである」）。

向社会的行動 尾関ほか（2008）で作成された項目の中から、因子負荷量の高い項目上位5項目を用いた（例「困っている人を見たら声をかける」）。

結果

教師用質問紙で用いられた、青少年の健全育成に向けた大人の取り組みについては、因子分析（一般化最小2乗法, promax回転）を行った。固有値の減衰状況（4.15→1.19→1.13→0.67）と解釈可能性から2因子解を採択した（Table 1）。第一因子を「青少年の健全育成に向けた環境整備」（ $\alpha=.78$ ）、第二因子を「地域住民による声かけ」（ $\alpha=.82$ ）と命名した。それぞれの因子について学校ごとに教師評定の平均値を算出し、同じ学校に所属する回答者全員に同一の得点を与え、分析に用いた。

同様の因子分析を、地域住民との私的交流及び地域住民との公的交流についても行った。地域住民との私的交流については、固有値の減衰状況（2.39→0.92）から1因子であると判断した。なお信頼性係数は $\alpha=.72$ であった（Table 2）。地域住民との公的交流についても固有値の減衰状況（3.92→1.21→1.02→0.87）と解釈可能性から1因子であると判断し、信頼性係数を算出したところ、 $\alpha=.81$ であった（Table 3）。

地域住民との私的交流、地域住民との公的交流、非公式の社会的統制、社会的凝集・信頼、地域に対する愛着、向社会的行動については、尺度平均得点を分析に用いた。各指標の相関係数をTable 4に示した。

構造方程式モデリングによる分析を行った。そのうえで、Figure 1の仮説モデルをもとに、適合度指標と修正指標を参照しながらパスの追加及び削除を行い、Figure 2に示されるモデルを採択した。仮説としては言及しなかったが、地域に対する愛着については居住年数を統制した。このモデルの適合度は、 $\chi^2(31)=279.11, p<.001$, GFI=.98, AGFI=.97, CFI=.96, RMSEA=.05であった。

尾関ほか（2008）同様に、集合的有能感のうち、社会的凝集・信頼から地域に対する愛着へのパスが有意であ

地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響

Table 1 青少年の健全育成に向けた大人の取り組みの因子分析結果

	F1	F2	h^2
青少年の健全育成に向けた環境整備 ($\alpha=.78$)			
少年の健全育成に関するボランティアに協力, 参加する	.77	-.06	.57
少年に関する地域の集まりやイベントに参加する	.70	.02	.53
少年に関わる行政機関に協力して地域におけるサポート体制をつくる	.62	.03	.46
学校と連携して活動 (PTA 活動など) する	.52	-.04	.40
少年が遊んだり, スポーツをするなどの様々な体験をする機会を作る	.48	.15	.37
ピンクビラの撤去や有害図書の自動販売機の撤去運動などの地域における有害な環境を浄化する活動を行う	.38	.12	.30
学校のことに関心を持ち, 学校行事に参加する	.38	.14	.36
地域住民による声かけ ($\alpha=.82$)			
よその家庭の子どもであっても良いことをしたときは褒める	-.05	.95	.85
よその家庭の子どもであっても悪いことをしたときは叱る	-.03	.86	.71
日頃から地域の少年に声をかける	.24	.48	.46
累積説明率 (%)	34.96	44.61	
因子間相関	1.00	1.00	
	.60		

Table 2 地域住民との私的交流の因子分析結果

	F1	h^2
近所の人にほめられる	.74	.56
近所に住んでいる大人と挨拶をしたり, 話をしたりする	.66	.45
友達の家へ行ったとき, 友達の親とも話しをする	.63	.40
近所の人たちと家族ぐるみの交流がある	.60	.37
近所の人に注意をされたり, しまわれたりする	.31	.13
累積説明率 (%)	36.51	

Table 3 地域住民との公的交流の因子分析結果

	F1	h^2
地域で開かれている運動会に参加する	.68	.28
地域の大人や子どもが参加する, 自然体験活動 (ハイキングなど) や季節行事 (もちつきなど) に参加する	.63	.48
公園の掃除や, 花・木を植えるなど地域をきれいにする活動に参加する	.60	.45
地域で行う廃品回収 (リサイクル活動) やバザーを手伝う	.58	.41
地域の伝統技術 (伝統芸) 体験に参加する	.58	.43
地域で開かれている祭りで, 神輿を担いだり, おはやし演奏をするなどの役割を担当する	.57	.42
街の落書きなどを消す地域活動, パトロール活動に参加する	.57	.49
近隣で行われている子ども会に参加する	.50	.39
地域の人々がメンバーである, おどりのチームに参加する	.50	.44
地域の子どもの参加対象のボランティア活動 (ボーイスカウト・ガールスカウトなども含める) に参加する	.46	.29
累積説明率 (%)	32.49	

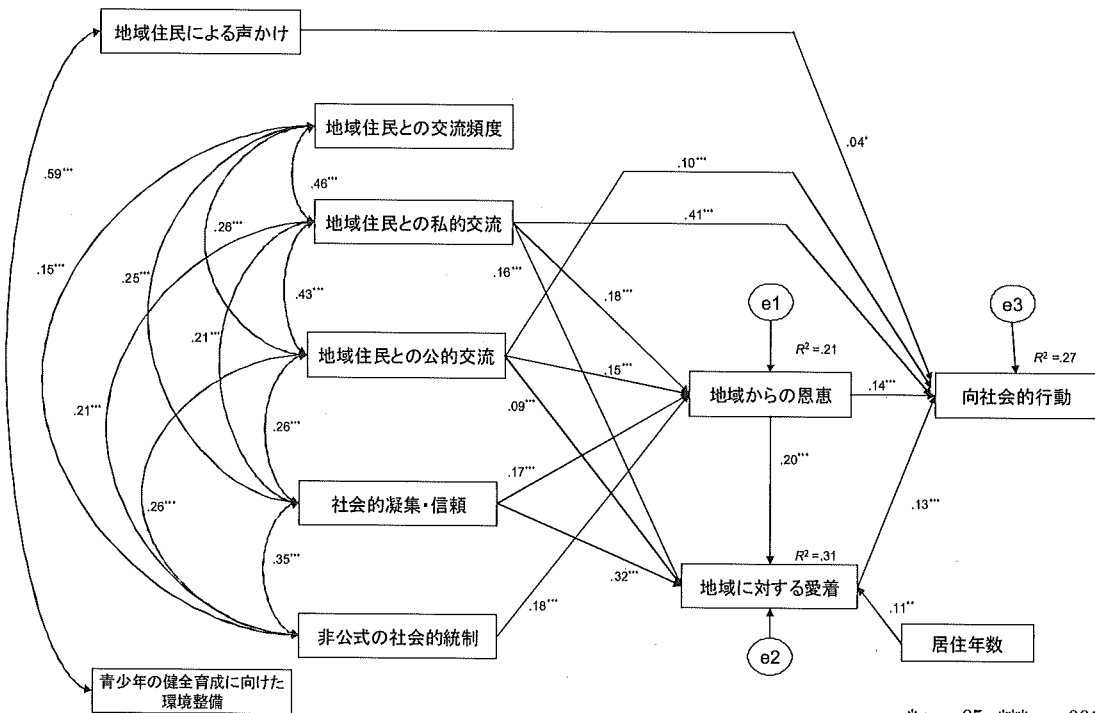
り ($\beta=.32, p < .001$), 地域住民との私的交流と地域住民の公的交流の両方が地域に対する愛着に正の影響を及ぼしていた (地域住民との私的交流 $\beta=.16, p < .001$; 地

域住民との公的交流 $\beta=.09, p < .001$)。そして, 地域に対する愛着が向社会的行動に正の影響を及ぼしていた ($\beta=.13, p < .001$)。

Table 4 各尺度の相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1 居住年数	11.14	(3.38)										
2 青少年の健全育成に向けた環境整備	2.52	(0.30)	-.04 *									
3 地域住民による声かけ	2.27	(0.27)	.00	.59 ***								
4 地域住民との公的交流	2.01	(0.77)	.13 ***	-.02	-.02							
5 地域住民との私的交流	2.79	(0.85)	.05 *	-.05 **	-.05 **	.43 ***						
6 地域住民との交流頻度	2.81	(1.47)	.08 ***	.04	-.02	.26 ***	.46 ***					
7 非公式の社会的統制	2.25	(0.74)	.05 **	-.01	-.01	.26 ***	.21 ***	.15 ***				
8 社会的凝集・信頼	2.52	(0.72)	.03	.01	.00	.26 ***	.34 ***	.25 ***	.35 ***			
9 地域からの恩恵	2.51	(0.82)	.08 ***	.00	-.02	.31 ***	.33 ***	.28 ***	.31 ***	.33 ***		
10 地域に対する愛着	3.39	(1.03)	.15 ***	-.01	-.01	.32 ***	.37 ***	.26 ***	.28 ***	.46 ***	.39 ***	
11 向社会的行動	2.86	(0.98)	-.04 *	.00	.01	.31 ***	.49 ***	.30 ***	.25 ***	.23 ***	.24 ***	.31 ***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$



* $p < .05$, *** $p < .001$

図中の係数は全て標準化偏回帰係数

Figure 2 向社会的行動の予測モデル

集合的有能感、地域住民との私的交流、地域住民との公的交流の全ての指標が地域からの恩恵に正の影響を及ぼしていた（非公式の社会的統制 $\beta = .17$, $p < .001$; 社会的凝集・信頼 $\beta = .18$, $p < .001$; 地域住民との私的交流

$\beta = .18$, $p < .001$; 地域住民との公的交流 $\beta = .15$, $p < .001$ ）。そして地域からの恩恵は地域に対する愛着に正の影響を及ぼすとともに（ $\beta = .20$, $p < .001$ ）、向社会的行動にも正の影響を及ぼしていた（ $\beta = .14$, $p < .001$ ）。

教師評定による指標については、地域住民による声かけが向社会的行動を予測していたのみであった ($\beta=.04$, $p<.05$)。

考察

本研究で得られた結果から、地域住民との具体的な相互作用によって地域に対する愛着は高められ、その結果として向社会的行動を予測することが示された。これは、所属集団の他成員との相互作用を通じて心理的紐帯が形成される (Geartner, Iuzzini, Witt, & Oriña, 2006) という知見や、子どもがコミュニティに対して抱いている愛着が向社会的行動を予測するという知見 (Clary & Miller, 1986) と一致する。社会的凝集・信頼から地域に対する愛着を経て向社会的行動を予測するパスが存在した点に関しては、尾関ほか (2008) と一致していた。

集合的有能感に対する認知と大人による環境整備

青少年の健全育成に向けた環境整備などを通して、地域の子どもの問題を起こすことがないよう大人が積極的に活動していても、それが集合的有能感の認知と関連がみられなかったことには留意する必要がある。こうした活動は非公式の社会的統制につながるものでありながら、これらの変数間には関連がみられなかった。その理由として、青少年の健全育成に向けた環境整備の回答者である教師は勤務校の校区内に居住しているわけではないので、教師の回答は地域で実際に暮らしている子どもの回答とはかなり独立であり、関連がみられなかった可能性があげられる。これ以外に考えられる理由としては、青少年の健全育成に向けた環境整備として今回の調査で用いられた項目の中には、「少年の健全育成に関するボランティアに協力、参加する」「学校と連携して活動 (PTA 活動など) する」のように、大人の間で行われることはあっても子どもが参加対象者にはならない場合が想定されるものが複数あったことも影響したかもしれない。すなわち、子どもは自分自身がこうした活動に参加していないと、非公式の社会的統制に対する認知とこれらの活動を結びつけない可能性があるということである。また、たとえこれらの活動が頻繁に行われていても、ごく少数の限られた大人の手で行われるなどの理由であり知られていなければ、やはり非公式の社会的統制につながりにくいのかもしないし、頻度よりも活動の質の方が重要であることも考えられる。原因としては以上の理由が考えられるが、この結果は、大人が青少年の健全育成に向けて環境を整えても、子どもの認知する集合的有能感に影響するのは別の要因であることを意味している可能性もある。子ども自身と大人との交流に関する指標が、

集合的有能感と相関があることを考慮すると、子どもは大人との交流を通じて、地域の集合的有能感がどの程度高いかを推測してはいるのだろう。しかし、地域行事をはじめとした大人たちの取り組みは一定水準以上の集合的有能感がなければ困難であることまでは理解できていないかもしれない。ただし、この点については推測の域を出ない。

地域住民との交流と地域に対する愛着

地域住民との公的交流から地域に対する愛着への影響力はごく弱いものであったが、近隣の大人との個人的な交流が向社会的行動に対する直接の予測力が高かった。高齢者と子どもの交流を扱った研究では、高齢者と長く関わることで親密さを感じ、高齢者に対する援助行動が促進されていた (村山, 2009)。この結果から、村山 (2009) は、世代間交流は一時的な交流よりも継続的な交流の方が、また強制的・人工的な交流よりも自然にコミュニケーションが楽しめる交流の方が、子どもによる向社会的行動の促進には有効であると指摘している。この指摘を本研究にあてはめると、単なる地域行事への参加よりも、普段の生活の中での地域住民との関わりの蓄積が子どもの向社会的行動につながる可能性が高いということになるだろう。

一点のみ、地域住民との私的交流を測定する尺度の中で、「近所の人にほめられる」の因子負荷量が最も高い点に留意する必要がある。地域の大人から褒められた経験が向社会的行動によるものである可能性を考えれば、項目レベルの相関が、地域住民との私的交流が向社会的行動に及ぼす影響を強めているかもしれない。

地域からの恩恵と向社会的行動

本研究で新たにとりあげた地域からの恩恵が、向社会的行動を直接予測していた。これは、子どもたちが地域の大人との交流や、大人が地域の安全を守るために協力しているという認知から、日常生活の中で恩恵を感じていると、自分のできることで恩を返そうと、向社会的行動を起こすためだと考えられる。より詳細に述べると、地域社会からの恩恵を感じていると、まず互恵性の原理に基づいて「受けた恩を返す」ことを志向する (Gouldner, 1960) だろう。しかし、この場合において、互恵性の原理でいう恩を返す相手として想定されるのは地域という漠然とした対象であり、子どもは地域に恩を具体的な行動で返すことは不可能に等しい。そこで、自分に援助を与えてくれた者とは別の者に対しても向社会的に行動する (中島・吉田, 2008) ことで、恩返しに相当する行為をしたことにしているのかもしない。

本研究の課題と展望

本研究の課題としては、ここでの向社会的行動の相手が主に地域住民であることが想定されるために、地域住民との私的交流が直接向社会的行動を予測した可能性がある。そこで、今後の検討課題としては、地域の中での日常生活を離れた場での向社会的行動にまで般化されるかを検討し、地域社会の中で子どもの向社会性を養うことの重要性をより明確にすることが望まれるだろう。

これ以外の今後の課題として、地域からの恩恵が1項目のみであったことが挙げられる。今後は、子どもたちが何をもとに恩恵を受けていると感じているのかを明らかにするなどして、恩恵の内容やその予測因を具体的に明らかにする必要がある。さらに、地域から受けたと感じる恩恵が向社会的行動の促進だけではなく、社会性発達のどのような面に影響を与えているのかを明らかにする必要がある。

本研究で得られた結果から、地域からの恩恵と並び、地域に対する愛着も依然として向社会的行動の重要な予測因であることが示唆された。これらの二つを高めるうえで大人に必要とされることのひとつには、大人が普段から子どもたちとの自然な交流をもつことがあげられるだろう。今後は大人との相互作用だけではなく、近隣に住む学年の異なる子どもたちとの交流や、友人や仲間との学外での交流のあり方などが、地域からの恩恵や地域に対する愛着に及ぼす影響も検討する余地がある。

以上の課題を踏まえ、子どもが向社会性を身につけるうえで、地域社会において実現可能かつ有効な施策につながる知見を蓄積する必要があるだろう。

引用文献

- Brown, B., Perkins, D. D., & Brown, G. (2002). Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis. *Journal of Environmental Psychology*, 23, 259-271.
- Browning, C. R., Feinberg, S. L., & Dietz, R. D. (2004). The paradox of social organization: Networks, collective efficacy, and violent crime in urban neighborhoods. *Social Forces*, 83, 503-534.
- 文化庁政策課 (2002). 文化審議会中間まとめ「文化を大切にする社会の構築について～一人ひとりが心豊かに生きる社会を目指して」
http://www.mext.go.jp/b_menu/public/2002/020102ahtm#top (2009年9月19日)
- Clarly, E. G. & Miller, J. (1986). Socialization and situational influences on sustained altruism. *Child Development*, 57, 1358-1369.
- Geartner, L., Iuzzini, J., Witt, M. G., & Oriña, M. M. (2006). Us without them: evidence for an intra-group origin of positive in-group regard. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 426-439.
- Gouldner, A. W. (1960). The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*, 25, 161-178.
- Haslam, S. A., Jetten, J., Postmes, T., & Haslam, C. (2008). Social identity, health and well-being: An emerging agenda for applied psychology. *Applied Psychology: An International Review*, 58, 1-23.
- Mesch, G. & Manor, O. (1998). Social ties, environmental perception, and local attachment. *Environment and Behavior*, 30, 504-519.
- 文部科学省生涯教育審議会 (1999). 生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ―「青少年の『生きる力』をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について」― (答申)
- 村山陽 (2009). 高齢者との交流が子どもに及ぼす影響 社会心理学研究, 25, 1-10.
- 内閣府 (2007). 平成19年度版国民生活白書
http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/05_youshi/index.html (2009年9月27日)
- 中島誠・吉田俊和 (2008). 日常生活における第三者を介した資源の衡平性回復運動 社会心理学研究, 24, 98-107.
- Odgers, C. L., Moffitt, T. E., Tach, L. M., Sampson, R. J., Taylor, A., Matthew, C. L., & Caspi, A. (2009). The protective effects of neighborhood collective efficacy on British children growing up in deprivation: A developmental analysis. *Developmental Psychology*, 45, 942-957.
- 大山理香・添田昌志・大野隆造 (2007). 大学生のキャンパス周辺地域への愛着に対する研究 その2―場所への愛着の形成と地域における行動への影響― 日本建築学会大会学術講演梗概集, 1065-1066.
- 尾関美喜・朴賢晶・中島誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田俊和 (2008). 社会環境が子どもの向社会的行動に及ぼす影響 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 55, 47-55.
- Sampson, R. J. (1989). Local friendship ties and community attachment in mass society: A multilevel systemic model. *American Sociological Review*, 53, 766-779.
- Sampson, R. J., Raudenbush, S. W., & Earls, F. (1997).

地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響

Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science*, 277, 918-924.

Staub, E. (2003). *The psychology of good and evil: Why children, adults and groups help and harm others*. New York: Cambridge University Press.

吉澤寛之・吉田俊和・原田知佳・海上智昭・朴賢晶・中島誠・尾関美喜 (2009). 社会環境が反社会的行動に及ぼす影響—社会化と日常行動による媒介モデル— 心理学研究, 80, 33-41.

(2009年11月15日受稿)

ABSTRACT

The Affect of Social Interaction with Community Residents on Prosocial Behavior
by Children: The Mediation Model by the Benefit of the Community
and the Attachment to the Community

Miki OZEKI, Hiroyuki YOSHIZAWA, Makoto NAKAJIMA, Takuya YOSHIDA,
Chika HARADA and Toshikazu YOSHIDA

A power of community has been emphasized in raising child recently . In this paper, we aim to reveal the relation among activities by adults intending to promote youth-rearing, collective efficacy, children's interaction with community resident, benefit of the community, attachment to the community, and prosocial behavior.

The responses of 3018 junior high school students and 545 teachers were used in the analysis. The results implicated that collective efficacy within neighborhoods enhanced the attachment of the children to the community mediating the benefits of the community, and promoted prosocial behavior. Interaction with community residents also predicted the benefits and attachment. However, activities by adults intending to promote youth-rearing scarcely related variables in this study.

The benefits of the community were considered to be a key factor in enhancing children's prosocial behavior.

Key words: collective efficacy, attachment to community, prosocial behavior, interaction with community residents, benefits of the community